

山田 忠治^{ちゅうじ}
(1883~1971/鷺塚)



1 いたずら好きの少年時代

山田忠治は明治16年(1883)、鷺塚村(現 碧南市鷺塚町五丁目)に山田小吉の二男として生まれた。満5歳のとき第十学区鷺塚学校(現 市立鷺塚小学校)に入学した。当時としても1年早い入学だが、父が当時戸長などをやり毎日役場に行き、家が留守になるときが多いからということだった。そこを卒業して明治30年県立第二尋常中学校(現 岡崎高等学校)へ第3回生として入学した。

子どもの頃は腕白で、小学校の低学年の頃1人で大浜港より伊勢へ抜け参り(黙って伊勢神宮へ参詣すると御利益が大きいとされた)をして、家族を慌てさせたり、4つ歳上の近藤乾郎(けんろう・洋々医館の近藤坦平の跡取り息子で、後医学博士)に平気でいたずらしたりした。

2 坂本龍馬の甥、吉田数馬が校長をしている土佐海南中学校に編入学

明治31年(1898)のことである。高知県尋常中学海南学校(現 高知県立高知小津高等学校)長の吉田数馬(坂本龍馬の甥)が岡崎を訪れ、海南学校の校風を話したことがあった。それに感動した岡崎町の小学校長の岡田(近藤乾郎の義兄)が、自分の息子ともう一人を海南中学校に転入させた。そのことと、土佐出身の上級生の小野豊吉の勧めもあり、翌明治32年(1899)、忠治は父に内緒で土佐にわたり、吉田校長宅を訪れた。吉田から「自分の家に住み込み、書生になれ」と言われ、喜んで書生になった。校長が馬に乗って登校するとき、忠治が馬のくつわを引いていったという。3年生に転入学を許可されてから親に手紙を出して許しを乞うた。

また、世間は広いようで狭いもので、近藤次繁(つくしげ・近藤坦平の娘婿で、後に東大教授となり、日本の外科医の権威)の実兄の鶴見次昌が、海南中学校で英語の教師をしていたのだ。この鶴見から父に連絡が入り、父も大変安心したという。

3 護国の血汐をたぎらせ、海軍兵学校に入学

おそらく日露の風雲急なるに対して、護国の熱情(軍人志願)が忠治を土佐に走らせたのであろう。ところが長兄が28歳の若さで病死し、父は忠治の軍人になるのを反対した。そこで忠治は「一度だけ海軍兵学校を受験させてください」と父に頼み、許されて受験した。何と一度で海兵入試の難関を突破してしまったのである。

明治35年(1902)12月、海軍兵学校33期生徒として江田島へ赴いた。天下の俊秀が集まり、同期生は180名いた。在学中に日露戦争が始まり、最上級生になったとき、山本海軍大臣に「第一線に出陣させてくれ」とみんなで嘆願した。しかし、「戦争は先輩に任せ、しっかり勉強せよ」と言われた。明治38年(1905)、海軍兵学校を卒業、このときはもう日露戦争は終わっていた。

4 水上機高度の世界新記録を樹立

明治44年(1911)12月、海軍大尉に任官、翌年の2月、新川の材木商岩田以手紙の長女うたと結婚した。そして、航空搭乗員を志願し、その年7月に渡米した。アメリカでは操縦術練習をして年末に帰国した。アメリカで操縦免許を取得した日

本人の3人目であった。(軍人としては初) 帰国後忠治は、カーチス式(アメリカ産で、主翼が二重になっている複葉水上機・75馬力)の教官に任ぜられた。

大正2年(1913)、横須賀鎮守府司令長官より、「飛行機の研究に従事せよ」との訓令を受け、未知の航空界を開拓する第一人者となった。そして、教官となって練習将校を指導した。翌年の大正3年(1914)6月24日、水上機で高度2500メートルまで上昇し、当時としては水上機高度の世界新記録を作った。

5 第一次世界大戦で、飛行隊として活躍

この頃からヨーロッパには戦雲が立ちこめ、間もなく第一次世界大戦が勃発した。日本も参戦し、初めての飛行機での実戦が行われた。当時、揃いの飛行服などなく、忠治の飛行帽は、愛妻うたの手編みの毛糸で、目のところだけが出て、頭や顔はすっぽり入るといふ覆面式だった。

飛行目的は偵察であったが、攻撃も行い、空中戦もあった。地上から小銃や機銃で撃たれたり、忠治搭乗の機は、駆逐艦を狙ったのが全部外れ、運良く水雷艇に爆弾を命中させ命拾いをしたこともあった。飛行隊は連日偵察、攻撃を行い、平時の数倍活動して事故ゼロで、忠治は軍人としての最高の勲章、(きんし)勲章(功5級)・年金300円及び五等旭日章を授かった。

6 飛行訓練で新須磨に着陸、大勢の見物人の中で錦を飾る

大正7年(1918)、横須賀航空飛行隊長のとき、長距離飛行訓練として追浜(神奈川県横須賀市)と碧南新須磨を忠治はコースとして選んだ。これは新須磨が水上機基地として立地条件が良かったのと、演習費の不足分を父や舅が村長や町長をしているので地元で負担してもらうことが出来ると考えて決めたのだ。忠治の計画は当たり、2月26日から3月1日まで新須磨は、当時珍しかった飛行機を見ようと、すごい人出であった。忠治も故郷へ錦を飾ることが出来た。

7 「予科練」の生みの親

大正8年(1919)2月、虫様突起炎の後、海上航海の激務のため無理がたたって翌年から肺尖炎(初期結核症)のため転地療養を余儀なくされ、その後退職した。大正12年(1923)4月に肺尖炎は全治した。このとき忠治は40歳であった。実はもっと早く完治していたのだが、地元洋々医館で、幼なじみの近藤乾郎博士が慎重に慎重を期したせいだと言われている。

復職後もやはり飛行関係の仕事を作り、昭和3年(1928)忠治が海軍省へ上申した意見が採用され、海軍飛行予科練習生が募集されるようになった。そのとき、海軍大佐になり教頭や校長などを歴任した。「赤い血汐の予科練の……」の生みの親は、山田大佐ということになる。昭和9年(1934)、海軍少将になった。

昭和11年(1936)予備役となり、長年着慣れた軍服を脱いだ。そのとき山本五十六元帥(海軍大将)に「大艦巨砲主義は時代遅れである。巨砲主義より飛行機主義に変えよ」と進言した。

8 田畑を耕し、碁を楽しんだ晩年

昭和20年(1945)、大空襲で東京の自宅は焼失したが、23年まで終戦の処理の仕事をした。戦後、63歳で鷺塚に帰り、日中は百姓をやり、土曜の夜は碁をやった。昭和46年(1971)、88歳で死去した。

◆もっと知りたいなら

- ・『元海軍少将 山田忠治伝』
(昭46市史料第12巻林口孝)
- ・『山田忠治伝』
(昭63「わしづかの今昔」山田五良)